

論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名 池田 真志

本研究は、生産と流通を包括的に捉えようとする「生産・流通システム」の概念に立脚しつつ、1990年代後半以降に起こった日本の流通・外食産業における変化を解明しようとしたものである。

第二次大戦後、先進各国では、大量生産・大量流通システム（大量システム）のパラダイムに基づいた流通産業が発展し、社会生活に大きな変化をもたらされた。日本でも、高度経済成長期以降、流通革新の名の下に、全国的なスーパーチェーン企業が台頭し、流通チャンネルの主役を占めるようになった。さらに、流通産業における変化は近接領域である外食産業にも波及し、大規模外食チェーンの誕生を見た。しかし、そうした大量システムは、1990年代半ば頃から大きな転換期を迎え、流通のみならず生産のあり方を含めたパラダイムシフトが生じつつある。

このような動きは、始まってから日が浅い現象であるために、断片的な報道から知り得るのみで、これまで学術的な研究はほとんどなされてこなかった。本研究では、日本の流通・外食産業におけるいくつかの先端的事例を取り上げ、アンケートと聞き取りを中心とするフィールド調査に基づいて、生産・流通の現場で起こっている新しい事態を把握し、さらに「リスク」を主要な鍵概念とした分析によって、その成立要因を解明しようとしたものである。

本研究は6章から構成されている。第1章では、本研究の問題意識と目的を明らかにし、既存研究のレビューを踏まえて、研究の方法を導き出している。第2章では、大量システムのパラダイムに関する概念を整理し、チェーンストアの成長と1990年代後半以降の流通産業における変化を既存資料や統計などから概観した。第3章から第5章は、生産・流通システムの再編成に関する実証分析である。まず、第3章では、アパレル産業において製販統合型アパレル企業（SPA）が台頭した要因と、SPAの生産・流通システムが持つ地理的な特徴を分析した。その結果、SPAはマーケットリスクを回避するために生産時期を販売時期に極力近づける「延期化」を行い、生産時期によって産地をグローバルかつ柔軟に使い分ける生産・流通システムを形成しているという興味深い事実が明らかとなった。第4章では、大手スーパー企業によって形成されたいわゆる「顔が見える」野菜の流通について、その特徴と成立要因をリスク分散という新しい観点から分析した。その結果、「顔が見える」流通は、流通の「個別化」によって実現され、生産・流通システム全体としてリスクが増大するが、それをスーパーも含めた各流通段階で分散させるアプローチが取られていることが明らかとなった。第5章では、外食チェーンによる契約栽培・農業参入と産地への影響を分析した。外食チェーンは大量システムにおける問題点を克服するために契約栽培や農業参入に乗り出しているが、大量システムでは中間流通が分担していたリスクや機能を産地と外食チェーンで分担しているというこれまでにない知見を得た。第6章では、事例研究で得られた知見を総括し、生産・流通システムが卸売市場流通を介した「不特定多数結合・効率型モデル」から、特定の産地・生産者と小売・外食企業が結びつく「特定少数結合・高付加価値型モデル」に再編成されつつあること、さらに、その再編成が、①「流通機能の空間性」、②「リスク分散の空間性」、③「地域間結合の空間性」の3点で空間的な再編成を伴うことを指摘した。

以上のように、本研究は、今日の生産・流通システムにおけるパラダイムシフトをいち早く捉え、綿密なフィールドワークに基づいて実態を明らかにした上で、その成立要因をリスクの分担という新しい視角から解明した点で独創的であり、流通地理学をはじめとした多くの関連分野における大きな学術的貢献が認められる。よって、本審査委員会は、本論文の提出者である池田真志は博士（学術）の学位を授与される資格があるものと認める。